

工夫して、指導していきましょう。

石井康雄（前船橋市立金杉台小学校 校長）

Q

1年生「10よりおおきいかず」は、どのように指導していくとよいでしょうか？ また、13を103と書き表す児童には、どのような指導をしたらよいでしょうか？

A

多くの学校では、入学前の保護者説明会において、入学までに「10までの数は、数えられるようにしておきましょう」と話します。そのため「10よりおおきいかず」は、子供にとって、小学校で初めて経験する数となります。

導入では、P30～31の挿絵を使って発問をしていきます。「川の両側の動物や花はぜんぶでいくつありますか。」という問いに対して、この時期の子供ならば、うさぎは「10と3で、13びき」と答えるでしょう。なぜなら、運動会の玉入れなどで、10以上を数えることを体験したからです。P32でえんぴつくんが言うように、13は「10」と「3」の合成数です。13を「103」と記述してしまう子は、この「じゅう」「さん」を漢数字のようによみ方のまま数字を続けてかいた結果と考えられます。そこで、10より多いものの数に多く触れさせ、10、11、12、…、20の数のよみ方とかき方を繰り返し練習させましょう。この段階で位取り記数法を徹底する必要はありませんが、数図ブロックや数図と数字を対応させることで、13の1は「10」が1こ、3は「1」が3こあることを表していることを示してもよいでしょう。P33では、数の概念を定着させる指導です。数のよみ方やかき方、大きさくらべなど、教科書に従って順序よく指導しましょう。P34では2とびや5とびのような数え方の工夫を学習しますが、そのときにも児童によっては数字のよみ方かき方に重点をおいて指導するようにします。

P35は、10を超える数の合成・分解です。10までの数の合成・分解が既習となり、「10より大きい数でも合成・分解ができますか」と問いかけ、二人一組で活動をさせましょう。ここでも「10といくつで〇」の合成から入り、「〇は10といくつですか」の分解へという順に指導しましょう。

P36からは、数系列についての学習です。挿絵のように黒板などを使って大きさの順にカードを並べさせます。この活動をじっくり行わせましょう。これが出来れば、「かずのせん（数直線）」をつくり出すことができます。子供の思考の流れを大切にしながら、教科書のように順に教えていきましょう。学年が上がるにつれて、学習対象となる数は大きくなったり、小数や分数のように小さくなったりしますが、いずれも場合もこの数直線の指導が基本事項になりますので、発問を工夫して心に残る指導をしましょう。

P38は「10といくつ」という数の構成に基づいた計算です。ここでは、前時までの合成・分解の学習を受けて、 $10 + 4$ の仕方をはるさんの吹き出しのように、数図ブロックを使って全員に言わせるようにします。一人一人が確実に言えるようになるまで指導することが重要です。学級の実態に即し、工夫して指導していきましょう。

P39は（十何）と1位数との繰り上がり・下がりのない加減計算です。1位数の計算をした後、「10と

いくつ」に着目させましょう。

P42 からの復習では、子供たちにとっては△が理解しにくいので、この花の絵が何を意味しているのかということ、少しでも全体指導してほしいです。

Q

1 年生「なんじ なんじはん」で、時計のよみ方の定着を図るには、どうしたらよいのでしょうか？

A

時計がよめるようになるには、反復学習が効果的です。そこで、日常の学校生活の中で時計のよみ方をいつでも指導できるようにします。そのためには、P44～45 にある挿絵のように、一日の学校生活を時間の経過とともに確認していきます。つまり、アナログ時計と実際の活動を結びつけることで、確かな理解につなげていきます。そして、挿絵と同じような掲示物をつくり、時計の近くに設置して、いつでも確認できるようにしましょう。最近はデジタル時計が日常化していることもあって、アナログ時計の長針と短針の見方の定着には時間がかかりますが、学校生活の流れに沿って、教室の時計や掲示物を効果的に使ってよみ方を繰り返し指導していけば、いずれは挿絵などが無くても正しくよめたり、時計を操作したりすることができるようになります。P45 の QR コンテンツは、時計のよみ方がクイズ形式になっていますので、家庭学習でも活用できます。

Q

1 年生「おおきさくらべ (1)」では、どのようなことに気を付けて指導したらよいのでしょうか？

A

「大きさくらべ」では、量の概念とその比べ方を指導します。比べ方の学習は、一般に「直接比較」「間接比較」「任意単位による比較」「普遍単位による比較」と進めていきます。1 年生では、「直接比較」「間接比較」「任意単位の比較」を扱います。指導においては、それぞれに合う場面を設定し、どのように比べればよいかを児童から引き出すことが大切です。

P48、49 では、手元に 2 本の鉛筆を用意して「直接比較」をします。P48 の子供やゆいさんの吹き出しにあるような鉛筆の並べ方で比べさせると、どちらが長い意見が分かりますので、この相違を大切にしましょう。そのあとで、意見が分かれた理由を話し合わせ、えんぴつくんのように、「端を揃えて比べる」「まっすぐに並べて比べる」という、比較の仕方の基礎を引き出しましょう。はるさんやりこさんの吹き出しのような発問をします。子供たち自身が発見することで、見方・考え方の力が付いてきます。この測定基準をつくる活動は、比較（比べ方）の基本になりますので、全員に作業させます。

P50 では「間接比較」を扱いますので、手元での「直接比較」ができない場面をつくるようにします。

P51 は「任意単位による比較」です。「任意単位による比較」では、それまでの「どちらが長い」だけでなく、「どちらがどれだけ長い」を問い、数値化する必要性を持たせます。

P52 からの「かさくらべ」では、見た目と測定したときの感覚の違いをつかませ、「かさ」の概念を指導していきましょう。2 年生の「かさ」の指導への指導過程を確認し、思考がつながっていくよう工夫して指導しましょう。